

「やもめの献金」

2015年12月01日

ルカによる福音書 21 章 1 節～4 節。イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

エルサレム神殿には、最も奥まった所に「契約の箱」が安置された「至聖所」があった。至聖所は年に一度大祭司だけが入り、羊の血をふりかけ執り成しの祈り捧げる聖なる所で、他の者は決して入ることができなかった。その前に祭司だけが入れる「祭司の庭」があり、順に「イスラエル人の庭」「婦人の庭」「異邦人の庭」と4重の垣根で仕切られ、職業、性、民族によって区画される差別構造になっていた。「婦人の庭」に13個のラツパの形をした賽銭箱が置かれていた。それぞれの賽銭箱には神殿で用いられる用途が書かれ、自分の献げたい用途の賽銭箱に入れていた。人々はあこがれのエルサレム神殿に来て、篤い信仰を持って献げていた。賽銭箱の傍には祭司が立って、多額の献金者があった場合「どこどこの誰々さん、いくらー」と叫んでいたという。日本の神社仏閣でも、金額の多い順に、名前を石に刻んでいるのを目にする。

主イエスは目を上げ、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。すると、一人のやもめがレプトン銅貨2枚を入れた。レプトンは最小単位の貨幣で、128分の1デナリオンに当たる。1デナリオンは一日の労賃だから、64分の1の労賃分を献げた訳である。祭司は最少額の献金をしたやもめには目もくれなかった。ところが、主イエスはやもめの献金に注目し、弟子たちに「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである」と言われた。主イエスが貧しいやもめのレプトン銅貨2枚の献金を賞賛したことに対し、いささかの疑問を持つ。主イエスは「異邦人の庭」で、生贖の動物を途方もない値段で売りつける商人たちを追い払い、祈りの家を強盗に巣にしたと暴力的に「宮清め」を行っている。また、主イエスを陥れ、殺害しようとする神殿当局者たちが仕掛けてきた激しい論争を受け、見事に論破している。更に、神殿の崩壊予告もしている。墮落し切った神殿の意味を認めていないように思える。その神殿への献金を賞賛することはないと思うからである。街頭での募金活動は不正な団体が行っていることがあると聞く。街頭募金は信用できる団体のみ応じ、教会を通しての献金を心掛けている。エルサレム神殿への献金はしたくない。

主イエスは彼女の信仰に注目させたかったのであろう。夫を亡くしたやもめは不安な生活をし、事実、貧しいのに、持てる全てのお金を献げた。彼女は無一文になっても、神は自分を守り、生きる術を与えてくださると信じたのである。主イエスは、神に全幅の信頼を寄せる信仰を賞賛されたのではないか。

やもめの献金の箇所を読む度に、ある人の言葉を思い出す。「母は日曜日の朝、質屋に行って、お金を作り献金していた。そこまでしなければならぬのかと思った。」献金は身を削るものであるが、できない場合はすることはしない。しかし、神の守りを純朴に信じる信仰はおおらかで、心が解放されるであろう。